

彙報

二〇一四年度後期東洋学講座講演要旨

(東洋文庫創立九十周年記念、「アジアの古地図を読む」)

第五四五回 二月一日(月)

中国古地図の世界 — 地図文化史上の広輿図 —

鳥取大学非常勤講師 要木 佳美

『広輿図』は一五五七年(嘉靖三十六年)に刊行された中国最初の総合的地図帳である。

本講演は、大阪大学名誉教授海野一隆先生の遺著『地図文化史上の広輿図』(東洋文庫、二〇一〇年)により、中国地図史上における『広輿図』の意義について述べたものである。発表者(要木)は、海野教授の生前の委託を受け、大阪大学名誉教授小林茂先生、甲南大学名誉教授故久武哲也先生の監修のもと、原稿の整理・編集を行った。本発表は基本的に本書によっているが、『広輿図』の著者羅洪先の伝記および版本などについては、編者である要木が執筆

しており、発表においてもこの部分はそれによった。

中国は地図作成の古い伝統をもつ。三世紀晋の裴秀の『禹貢地域図』(佚)以来、方格をもつ伝統的な中国図が作成された。現存する最古の中国図は十二世紀の『禹蹟図』(陝西省博物館蔵)で方格図法によるものである。元には、朱思本の『輿地図』(佚)などが作成された。現存するものとして朝鮮の権近の『混一疆理歴代国都之図』(一四〇二年)がある。

これらの伝統的地図の集大成といえるのが、明の羅洪先の『広輿図』である。所載の地図はそれ以前とは比較にならないほど正確・精密で、方格をもち、伝統的な地図作成図法を受け継いでいる。また、辺境図や交通図、周辺国図を数多く所載する総合的世界地図帳である。十七世紀マテオ・リッチが『坤輿万国全図』を作成して地球球体説を紹介したのちも、『広輿図』は中国地図として影響を持ち続けた。清朝十八世紀に経緯線をもつ近代的地図『皇輿全覽図』(康熙図)が作成されるまで、『広輿図』は中国における最も優れた地図帳であった。

『広輿図』の著者羅洪先(一五〇四―一五六〇)は、有名な陽明学者である。羅洪先は江西吉水出身、嘉靖八年状元で進士に合格し、翰林院時代に宮中の地図を見る機会を得た。三十七歳で職を辞し故郷に家居してのちは陽明学者

として活躍し、聶豹・欧陽徳・鄒守益ら陽明学の主要な学者達と講学を通じて交流した。当時は北虜南倭の時代で、大きな危機感を抱いていた羅洪先は、軍事に対して強い関心をもった。軍事および科学方面に関心が強い当時の軍事担当官僚達と陽明学を通じて密接な関係を持ちながら、地図を収集し地理的研究を進めた。『広輿図』作成の意図は、現実の軍事的危機に対応しようとする実用的なものであった。陽明学右派の学問は実際の政治との関わり、実践を重んじ、経世致用の学へと発展し、明末科学技術の様々な分野の学問・研究が進められた。『広輿図』は陽明学から経世致用の学への学問の流れの中で著された、伝統的地理学の一つの集大成であり金字塔であった。

『広輿図』の初版本（中国国家図書館蔵）は嘉靖三十六年（一五五七年）に出版され、嘉靖四十年に胡松らにより日本図などを附けた増補版が出版された。十八世紀末まで計八回版を重ねたことは、需要・影響の大きさを物語っている。

『広輿図』の中国全図と各省図は、元の朱思本の『輿地図』（一三三〇年頃）（佚）を基本的資料として作成されている。朱思本は江西臨川の人で道士である。『輿地図』は方格図法による大型の一枚図であり、『広輿図』は中国伝統の方格図法を受け継いでいる。

『広輿図』は地図を主体として記事を合わせもつ総合的地図帳で、黄河図、海運図などの主題図と、九辺図など十六枚もの辺境図を所載する。これは羅洪先の経済・交通および辺境への関心の強さを表している。さらに、『広輿図』の特徴は世界地図帳であることで、朝鮮・安南や、増補版では、日本図などを含む周辺図を多く所載している。これらの周辺図は現地の土着の地図や、李沢民（元）系地図などを資料としている。

『広輿図』は出版後多くの地図や書物に大きな影響を与えた。『広輿図』の体裁や構成をまねた地図帳が次々と出版された。また清末まで、地誌・軍事・水利・百科全書・天文など多くの分野の書物に、『広輿図』の精密な地図が転載されている。さらに『広輿図』を利用した一枚図も数多く出版され、康熙図出現以後も民間で需要が多かった。このように『広輿図』は、十九世紀末まで中国では最も重要な中国図として利用され続けた。

『広輿図』は十七世紀初頭イタリヤのイエズス会宣教師やイギリスの航海家などによってヨーロッパに伝来した。サンソン（仏）の『アジア』所収の『中国図』など、『広輿図』を利用して、それ以前とは異なる正確な中国図が作成、刊行された。特に重要なものは、ブラウ（蘭）の『新地図帳』所収の、マルティニー（伊）の『中国新図』（一

六五五年）（東洋文庫蔵）で、仏・独・蘭・ラテン語版が出版され、好評を博した。十八世紀後半『皇輿全覽図』によるダンヴィル（仏）の『中国新地図帳』が出版されるまで、『広輿図』の中国図はヨーロッパにおける最も信頼できる中国図として利用されたのである。

以上のように、『広輿図』は中国伝統的地図の一つの集大成であり、中国地図界のみならず、西洋地図界における中国認識に大きな影響を与えた重要な作品である。

第五四六回 一二月三日（水）

山形細谷（細矢）家伝来「大明地理之図」 —江戸時代の東アジア大絵図—

東洋文庫研究員 細谷 良夫
東北学院大学名誉教授

東洋文庫研究員 小沼 孝博
東北学院大学准教授

「大明地理之図」は、明代の中国を中心に、朝鮮・日本・琉球・安南などを彩色で描いた巨大な東アジア絵図である。原図の存在は明らかになっていないが、現存するいくつかの模写図の特徴から、明末に中国で作成されたものが将来

された可能性は棄てきれないものの、おそらく江戸時代前期の日本で成立し、十七世紀後半以降、複数の模写図が作成され始めたと思定される。そのうち本講演では、山形城下で代々医業を営む家系に生まれた細矢玄俊（一七八六—一八四九）が文化十一年（一八一四）に模写し、以来細谷家（明治期に細矢から改める）に伝来してきた「大明地理之図」を取り上げ、その特徴を紹介した。なお本図は、二〇一四年度、細谷家現当主の細谷良夫により東洋文庫に寄贈された。

細谷家に伝わる系譜、および古文書群（「細谷家文書」、東北学院大学所蔵）によると、その「遠祖」は出羽守斯波兼頼（一二一五—一三七九）とされ、最上義光の家臣となった良俊（？—一六四三）が「大祖先」とされる。この良俊が弓矢に長じていたため、世人は彼を「矢氏」と呼んだが、謙遜して「細矢」を名のようになった。そして「医業之祖」と称される玄沢（一六九一—一七三三）の代より医業の道に入り、山形藩の「御用医」などをとめる家系となった。その医業六世にあたる玄俊は、文化三年（一八〇六）に医学を修めるため上洛し、翌年より仁和寺家臣となるも、文政二年（一八一九）には山形に帰郷して家督・家業を継いだ。多芸多才の人物で、かつ蔵書家であったとされる。

細谷家版「大明地理之図」には、「文化十一年甲戌孟春

五日細矢惟直模寫之」という一文と、「玄俊」「敬義堂圖書印」「惟直」「字伯温」という、すべて玄俊を指す四つの印記が残されており、玄俊本人が京都滞在中に本図を模写したことは疑いない。形状は軸装四幅に仕立てられ、一幅あたりの大きさは縦約三四五センチ×横約九〇センチ、東から西に第一図・第二図・第三図・第四図となっている。海上に浮かぶ帆船には和船と唐船の別があり、それぞれ乗船者の様相は異なる。陸地は区域ごとに色分けされ、明代の主要な地域や都市の名称だけでなく、古地名や名所旧跡が細かく描き込まれ、随所に漢文の註記が書き加えられている。現存する「大明地理之図」の模写図のなかで、細谷家版はその精巧さと保存状態からいつて群を抜く逸品である。「大明地理之図」の作成および模写の過程は不明な点が多く、今後の検証にゆだねねばならないが、絵図上に「興都」が見出せることは、作成年代を推定する材料となる。すなわち、安陸州が置かれていたこの地（現湖北省鍾祥市）に、弘治七年（一四九四）に興王府が就藩した。その興王府より第十二代皇帝・嘉靖帝（在位一五二一―一五六）が出たため、即位後の嘉靖十年（一五三一）に興都と命名された。ゆえに「大明地理之図」の作成は興都の成立以降となる。

細谷版の第一図にある「例記」の冒頭には「此圖以禹貢

一統志圖書編等考焉」とあり、「禹貢」「大明一統志」「圖書編」等が参考にされたことがわかる。この文言は、成立が早い東京大学東洋文化研究所蔵「大明地理之図」（元禄三年「一六九〇」模写、以下「東大版」）にも見られ、実際にこれら中国地理書に由来する註記を確認できる。ところが、京都大学文学研究科図書館蔵「大明地理之図」（以下「京大版」）は、成立年代不明ながらも、上記一文の個所が「此畧大明秘藏焉而以世罕也」となっている。また京大版では絵図中に註記が少なく、地名の位置比定にも誤りがあるが、東大版・細谷家版にその誤りは反映していない。とくに注目すべきは琉球の形状である。京大版に描かれる「大琉球」が単なる島の絵図に過ぎないのに対して、東大版・細谷家版の「琉球国」には「中山王城」などの建造物が描かれ島の形態も異なる。後者は鄭若曾（一五〇三―一七〇）が著した『琉球図説』所載の「琉球国図」を参考にしていると考えられる。京大版が原図に近い特徴を残しているとすれば、以上の相違点は、「大明地理之図」の成立以降、日本における模写過程で考証補正と情報添加がなされたことを示唆する。東大版に模写者の筆で「模写之且補之」と付記されていることは、その傍証たりえよう。

「大明地理之図」は、明の時代だけではなく、様々な時代の情報がつまんだ一種の歴史地図である。また、九州北

部と寧波の間に朱線が引かれ、鬚を結った和装男性の乗る和船がその上をはしる。この線は室町時代の日明貿易（勘合貿易）の主要ルートと重なるが、周知のように、江戸時代に入ると日本人の海外渡航は禁止された。玄俊をはじめ、「鎖国」の時代に生きた人々は、「大明地理之図」を模写することで大陸の歴史と地理を理解しようとしたのかもしれない。「大明地理之図」は、江戸時代の日本における地図作成、および東アジア認識の実態を伝える貴重な資料といえよう。

第五四七回 一二月四日（木）

地理的認識の交流―古地図から―

京都大学名誉教授 応 地 利 明

一二―一四世紀に日本・中国・イスラーム世界で作成された三つの世界図をとりあげて、当時の文化圏がそれぞれに構築してきた世界認識とその交流について述べた。

(一)「五天竺図」(重懐書写、法隆寺・北室院蔵)、一三六四年(貞治三)

現存する日本最古の世界図で、三つの世界認識のコラー

ージュを基本構成とする。①古代印度の世界認識に淵源する仏教的世界観、②古代日本で成立した三国世界観、③古代西域で成立し中国の仏教僧の間で共有された四天子国世界観の三つである。それらは、図上では、①が仏典記載の「北広南狭、三辺量等、其相如車」にもとづく人間の居住大陸⇨瞻部州の構図、楽園⇨無熱惱池とそこから流出し瞻部州を潤す四大河川の描出、②が世界を構成する三国⇨日本・震旦(中国)・天竺(印度)の配置、③が瞻部州を分割・統治する四人の天子⇨人主・象主・宝主・馬主とその領域に関する囲み解説となる。

興味ぶかいのは、②にもとづく「巨大な天竺」に対する「過小な震旦」という描出である。そこからは瞻部州の中核は天竺であり、震旦はその付属的存在というメッセージを読みとりうる。その背後には、当時の対中国ナシヨナリズムの興隆があった。震旦の過小描出は、「五天竺図」とほぼ同時代の北畠親房が『神皇正統記』(一三三九年、延元四)の冒頭で述べる「震旦ひろしといえども五天(竺)にならぶれば一辺の小国なり」という言説と照応する。

(二)「古今華夷区域惣要図」(税安礼『歴代地理指掌図』所収)、一一四〇年ころ(南宋・紹興年間前半)

現存する世界最古の印行世界図とされる。その大きな特質は、「五天竺図」とは異なって、他文化圏で成立した世

界認識を受容することなく、独自の中華思想をもとに世界を描いていることである。具体的には、「天円地方」という漢族的世界認識にもとづく基本構図、「華夷意識」にもとづく世界の「華Ⅱ文明、夷Ⅱ野蛮」への両分と描出、「夷Ⅱ野蛮」の〈慕徳・朝貢の蕃夷〉と〈純然たる蕃夷〉との弁別と前者のみの記入、「華Ⅱ文明」の地を聖化する五岳Ⅱ泰山・衡山・華山・嵩山・恒山の強調記入などがある。五岳は「地の天子」が「天なる天帝」に報告と感謝を捧げる封禪・祭天の儀の挙式場であり、「古今華夷区域摺要図」がそれらを強調記入するのは当然のことであった。と同時に、それは、仏教的世界観に立つ「五天竺図」での四大河川の強調とは顕著な対照をなす。

(三) イドリースー図、一一五四年

地中海中部のシシリア島に成立したノルマン・シシリア王朝のルッジェーロ二世（在位一〇九五―一一五四年）の命によりイドリースーが作成した世界図である。同王朝下のシシリアは、キリスト教・ユダヤ教・イスラームが共生しあう地であった。イドリースー自身もムスレムであり、キリスト教徒の王の命によって世界図を作成したのであった。そのコスモポリタン性をもとに積極的な交流を行ないつつ、妥当性をもつと判断できるもののみを受容するという実証性、それがイドリースー図の世界描出を貫く

精神である。

その典型が、二世紀のプトレマイオス図の継承と革新である。イドリースーは、プトレマイオスから経緯線だけでなく、緯線の基準を赤道、経線の基準をカナリア諸島とする設定を受容する。また北半球をクリマータ（イクリーム）によって七気候帯に区分することも、プトレマイオスの継承である。このような基本的な作図準拠枠だけでなく、特徴的なナイル川の描出もプトレマイオスにもとづく。

しかし最大の革新は、プトレマイオスが巨大な内海としていたインド洋の外洋への解放にある。イドリースー図が作成された一二世紀には、イスラーム世界ではインド洋が開かれた海洋であることは「常識」であったであろう。彼がインド洋を大洋として描いたのは当然であった。同図のインド洋北岸とりわけその東端部の描出に注目すると、北方から南下してきた海岸線が西へと大きく転じる転換帯として描かれている。その部分の海岸線を「古今華夷区域摺要図」の陸域南東端と重ね合わせると、両図の海岸線は見事に一致する。

ここで想起されるのは、「古今華夷区域摺要図」が印刷された単行本の収載図であり、当時のバクダッドには漢籍が収蔵されていた記録が存在することである。刊行直後の『歴代地理指掌図』が最新の東方アジアの地理的情報とし

てイスラーム世界に将来され、それに準拠してイドリースイ
がアジア大陸南東端を描出したとの推考がなりたつ。東洋
文庫所蔵の『歴代地理指掌図』は稀覯書として名高く、当
日も会場に展示していただいた。その書が収載する「古今
華夷区域摠要図」の紙背に、このような壮大な交流を読み
取りうるのは楽しい。